北側、幅員1.8mの前面道路より見る。ほかの住宅は別の主要な道路と接道しているため、前面道路を私道のような扱いで利用することができる。

個室1より居間１を見る。天井のベイマツ登り梁は柱、間柱の455㎜ピッチの2倍の910㎜ピッチで配置。外部の垂木はその1/4の227.5㎜ピッチで配置。
登り梁に直行する母屋はケラバの跳ね出しのため455㎜ピッチとその他の910㎜ピッチで配置している。

雲谷町の家

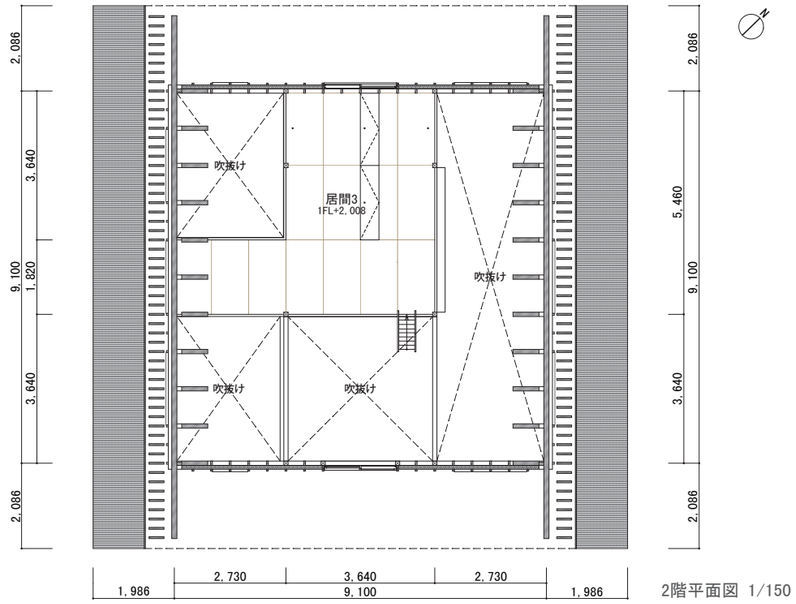
座談山の麓にある小さな集落の真ん中あたりに敷地はある。幅員1.8mの前面道路と、間口19m×南東側の竹林手前までの間に2m下がった奥行46mの傾斜地からなる。雲谷町の古い家を観察すると、母屋を中心とした農家住宅の形式だが、その中で納屋が営みの中継地点として内外を繋いで、暮らしを支えていることが見受けられた。この家でも、雲谷町の人びとの暮らしにおける納屋のハタラキを分棟形式ではなく、母屋に付随する内外の中間領域として室内と敷地の外側に開くこととした。

若い建主の将来を見据えた価値観から、広い敷地を使い尽くすように、家の内外に開いた大きな平屋とすること。また彼らの子供の特性で見守りが必要なことから、ひとりで外へ出ないように家の内外の境界をはっきりと明示すること。そんな内外の境界を巡る、相反するふたつの要望から設計が始まった。

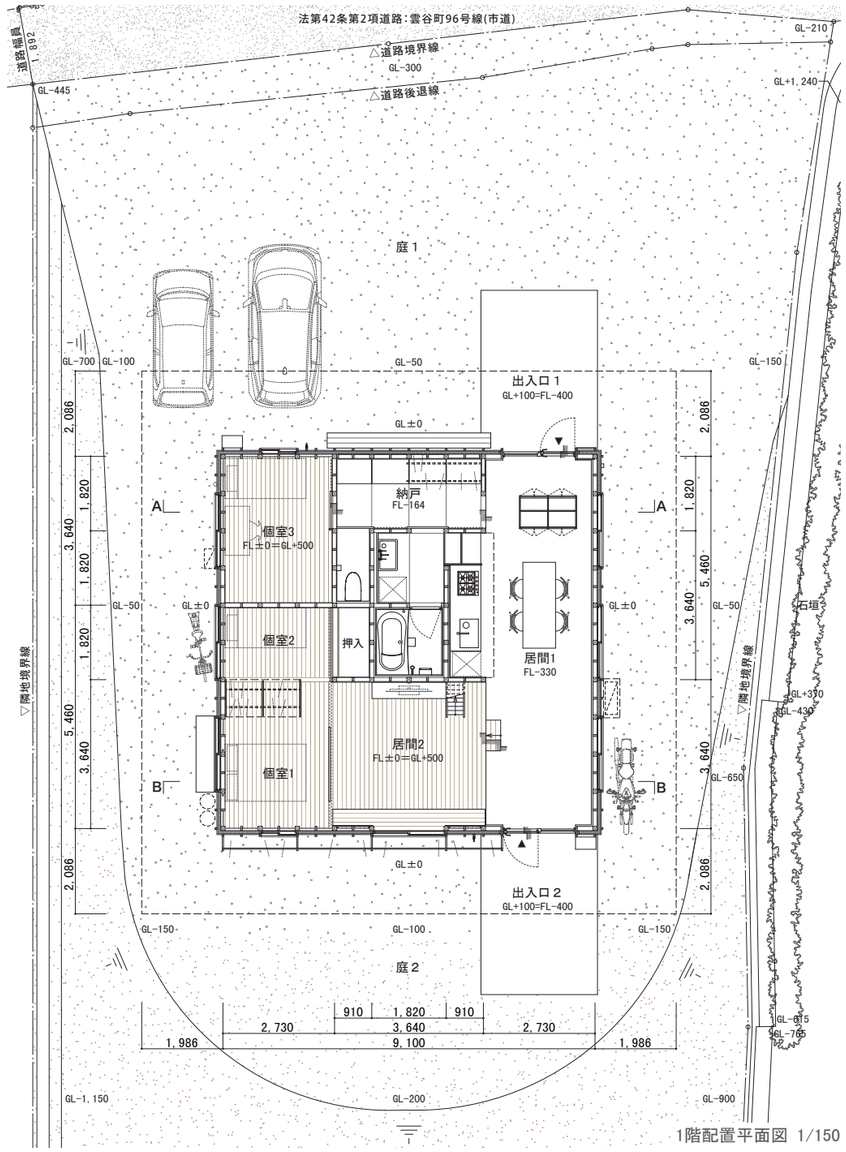
そのため、この家の構成は、水回りを居間、個室、納戸で囲い込み、外側に活動の場の表面積を増やした5間角入れ子構造に、1階の床面積と軒下の面積が1対1となるように奥行き2mの軒が周囲をぐるりと回る3重入れ子構造とした。

たとえば、境界の塀に布団が干されていると、塀が本来とは異なる機能をもった道具となることで、敷地境界を明示するハタラキを失い、フワッと軽くなる印象がある。ここには開き方の手掛りがある気がした。使い方によって機能が上書きされ、境界のハタラキを曖昧にして開く考え方だ。

そこで、本来開口を穿つ際に窓台とまぐさにより切り取られる柱、間柱をそのまま残した。その奥には、構造用合板、アルミサッシと各層が取り付く。外側は、構造用合板と同じ3尺幅のフレキシブルボードを柱・間柱と同じ1尺5寸間隔の押縁で留めた。外壁の内側と外側に同じリズムで整然と並ぶ柱、間柱、押縁には内外共にベンチ、棚板、ハンガーパイプ、設備機器が取り付き、機能を自由に付加できる道具として存在する。暮らしを外部から守るための外壁が、両側から使用できる道具となり、内外部の使い方の隔たりをなくすことで、境界を明示しながら、曖昧でもある両義的な外壁＝道具となった。そのため、使うほどに境界が消失して、多様な機能を備えた道具として生活を支えることで、外壁もまた開く気配を纏を纏うだろう。



2階平面図 1/150



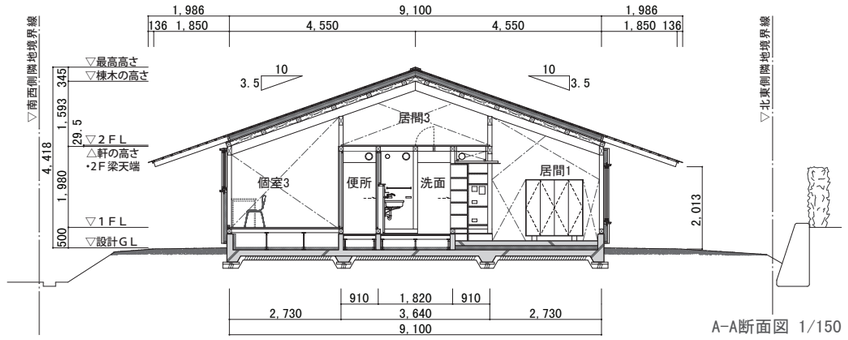
1階配置平面図 1/150

居間１より南東側の出入口２を見通す。出入口1・2と居間１の床仕上げを同様とすることで外部を引き込む、又は内部を外部に延長させる。

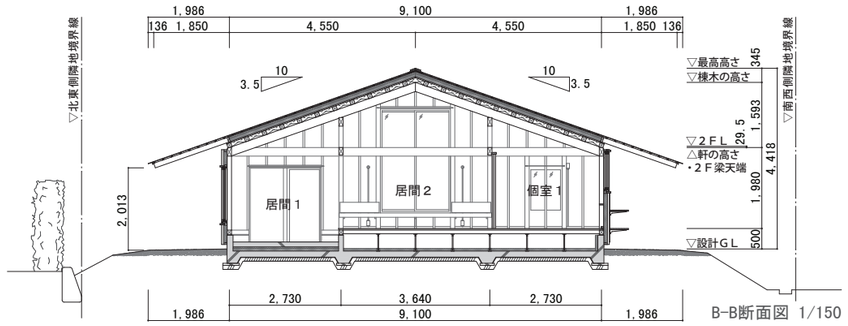
居間１より個室1を見る。居間同士の間には仕切りを設けず、架構や床の高さや異なる床の仕上げによって緩やかに変化を与える。空間の分節と連続の感じ方を体験者に委ねることができる状態を目指している。

居間２。左は個室1・2、右は居間１、上部奥は居間3。

台所。右は166㎜上がって水回りと個室３に繋がる納戸。左は330㎜上がって居間２。
台所天井裏の下地は現しとして、レンジフード用スパイラルダクト奥の洗面脱衣室と繋がっている。



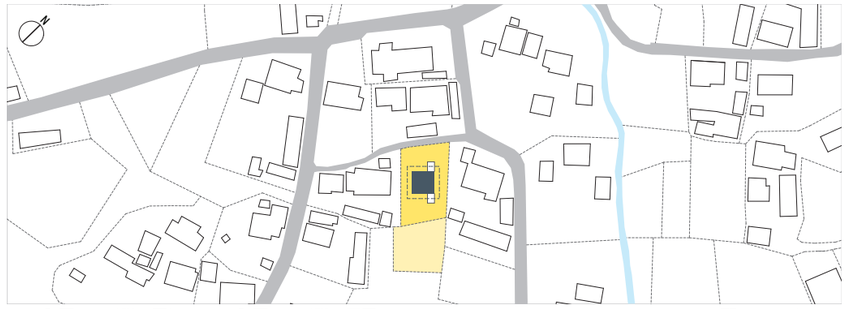
A-A断面図 1/150



B-B断面図 1/150

家族の個人的な事情に対して

発達障害の息子に対して、娘のプライバシーを確保して上げたい。常に息子の介護を行わないといけないため、娘が家族の中で疎外感を感じて孤立しないようにしたい。そんな両親の想いから、平面は個室が南西側に一列に並び、兄妹の部屋を隣合わせとした。但し、間仕切り壁を設けて、ぐるりと1周しないと辿り着けないように、この家で一番動線が長くなるように計画。それでも、上部では全ての箇所が繋がるワンルームとし、家族の願いがカタチとなった。



配置図 1/2,500

居間１。基礎、パッキン、土台、柱、間柱、耐力壁用構造用合板、桁、登り梁、野地板を現し（作り方の明示）とすることで、作り足すこと、補修すること、作り替えることが容易で道具のように自由な状態を目指した。

納戸。左は洗面脱衣室、奥は個室3に繋がる。

個室３より納戸を介し居間１を見る。

北東側夕景。押縁には設備や棚板が取り付く。